

# 虚の符

## 33

http://www.kozui.net

海禁今日子  
伍 雁信  
投稿通信

しらない誰かから、海をわたって、便りが届く。ならば、うしなわれた名も、壘に入っているのでしょうか。  
空の色、海の色。とけそうで、まざりませぬ。そんな水平線を、みるのが好きです。「雁信」ということばも思い出されます。古代中国で、雁の足を札をつけて、遠国に思いを託した故事から、手紙の意味があるそうです。雁が去り、わたって行く。その狭間に、文字が降っているようです。  
硝子のかたい、もろさのなかに、羽がさしこまれました。古い壘のほうが、温かいような気がするのは、手から手へ、そんな人肌の記憶が感じられるからでしょうか。時をこえて、線、あおく、まざる。いい。  
はつかり、かりがね。歌に詠まれた雁は、鴨などを含めた、わたり鳥を指したようです。ふだん、水面にいる彼らが、空を飛んでいるのを見ると、いまだにはつとします。わたってきたというのにね。そんなことも、壘につめる姿がうつりました。  
海に近い大きな川や貯水湖に、冬鳥がみられるようになりまし。種類が多すぎて、名前と姿が一致しません。枯れ草のむごう、水草のあいだに、うかび、水尾をひき、時に飛び立つ。冬の水辺はおおむね澄んで、水底をひきつれ、硝子がくぐもつた音をたてていた。雁がわたる。壘をわたす。羽のペン。水の裂け目を、ゆくよ。名をなくした。しずんだ先から、切りとられた景でしたか。壘がうかぶ、投げた記憶も。誰の、どちらから、でも、よかつたのです。人肌が、水に線、ひくように、雁、わたるよ。濡れた文字が、読めないままに肌をつたつた。

城跡では  
めぐるのに合わせて  
桜の木の下を歩くことができた

ほかにことばがあつてよきようなものだが頭が首につながつていれば幸いというこんな時にも同じことばしか出てこない  
——きれいだ  
妻と子と談笑しながら花を見たあの時とは同じことばでもこもる気持ちがあつたく違ふのだが  
——きれいだ  
いや やつぱりこのことばがいい花を見て言うことばとしてこれ以上のことばはないあの時も いまも

風をうけてともに散る花びらもきつとあるにちがいない首筋にひやりとした風があたる  
——もう望むことはない  
思つたことばを風が少し言いかえた  
——もう望みはない

懐紙  
平井達也

とつちらかつてしまつた旅程の中の一枚の皿に  
奇跡のように置かれた秋果が光っている  
旅程それは途切れずに剥き連ねられた果実の皮  
削いても削いても黒い夜空の果肉とも容器ともとれる  
球面性の瞬間瞬間  
球や円の存在が奇跡のようだ  
皿にも晩が均衡を保っている  
秋果を実らせていた枝を  
削いでも削いでも黒い夜空の旅程が引つかつてぶら下がつてしまつた枝だ  
黒い果実の皮まで食べる  
皿まで食べる  
宿主の皮まで食べる  
髄液は飲める  
とつちらかつてしまつた宴の最後のデザートとして供される  
酸味の強い祝意よ  
誰がどんなナイフで皮を削いた  
剥かれた皮を球と呼ぶか円と呼ぶか  
その上の一点にでも瞬間はあるか  
そこに自ずと  
一枚の旅程表に細かな装を折り込んでゆき球面性をもつ皿を形成すれば  
秋果は現れ発光を始めるだろう



水の中はあんなに暗いのに浮かんだ花びらは明るくきれいだ  
天守をなくした城跡は  
首をとられた武者の亡骸だ  
——おれの落ちて行く先はあの花びらよりもさだめない  
散る花びらを見て落ち武者は思つた

マチとサト  
二条千河

ねえサト、あんたつて本当におひとよしあてにもならないあの人の言葉を信じてずつと帰りを待ち続けるだなんてあの人はとつくにあたしのものなのに。  
無神経なあの人は  
あたしに抱かれながらいつもサトの自慢をする、  
だけど実際あんたはもうなつかしい過去でしかなくてあの人を食べさせることも嬉しませることもできない、子どもが生まれたつて大した教育もしてやれないし具合が悪くなくても病院にすら通わせられない。それでも、それだから、あの人が大好きで甘い思い出のほかには何も求めようとしな、あとのことはぜんぶあたしが引き受けてきた。そう、どんなにサトのほうが悪しくても。結局あの人は都合のいいあたしを選ぶしかない。  
ねえサト、本当はわかつてるんでしょあの人はずいぶんあなたには帰らない、  
とうとうか帰れない、  
少なくとも命のある間は——たぶん骨になつてもあなたが後生だいに守つてきたお墓には入らない。子どもには負担をかけたくないのが親心だもの、あたしのもとで生まれ育つた子どもにはお墓も空き家もそのうちに仕舞われる。あれもこれも取り上げられたサトはますますみすばらしく老けこんで美しいままなのはいつか消える古びた記憶だけ。  
みじめなサト、あたしはあんたが大好き、だつてあんたはあたしだから。  
子どもから見たら、  
実際あたしも取り立てて都合のいいマチじゃない、かつてあの人があんたにそうしたようにあてにもならない言葉だけ残して。じきにあたしのもとから離れていく。もつと都合のいい誰かに抱かれながらあたしのこと自慢するのかもしれない、なんてばかげた妄想だけでいつか向いてもいいようにあの子の補れる場所だけはどうにか守り抜くつもり、ねえ、あたしきつとあんたみたいなサトになるよ。



バス (2)  
池田 康

バスがサービエリアに停車する  
停車時間三十分とアナウンスがある  
用を足しに出る  
振り返ると赤い鉄錆色の車体が異様に大きく見えた  
地獄の業火をくぐり抜けてきたような緋マクマから飛び出してきたよみ朱  
禍々しい血の色  
用を足して戻つてくると  
バスは青く輝いていた  
青空を箔にして貼つたような青  
海の中から生まれてきたような藍  
これから宇宙の中へ入つていこうとするかのような紺碧  
なんの疑念も抱かず乗り込む  
ZZZ  
バスは橋の上を走っている  
長い長い橋だ  
橋の上ではなぜかとんでもないスピードを出す  
いけないとわかつていてもつい出てしまふ  
下は闇を煮詰めた黒い海  
大陸から大陸へ渡ろうとしているのかもめが飛んでいる  
水平線が見える  
お前はどこへ行くのか  
水平線が訊いてくる  
ZZZ  
夜のこと  
バスがどこかの停留所に停車する  
見るからにオバケとわかる異形の輩が乗り込んでくる  
ワイワイガヤガヤ言葉とも思えない声を出して  
実に奇妙な団体なのだ  
最後尾に座る何某には気づいていない  
不注意で呑気なやつら  
そのうち一人が通路で踊り始めた  
とてもヘンテコな踊りでみなグラーグラー笑っている  
踊り手は凶に乗つてさらに激しく踊る  
奇妙な笑いもいよいよ高まる  
つられてははと笑つてしまつた  
オバケたちが静まり返りこちらを見る すわや  
動転して我先にとバスの窓から飛び出していった



校庭  
池田 康

声はするのにな  
誰もいない  
校庭はがらんとして  
陽の光をひたすら敷きつめている  
巨大なとんぼの影  
南から北へ  
過去から未来へ  
見上げてとんぼはいなくて  
ランドセルが走ってくる  
ランドセルが考える  
ランドセルは眼る  
軽くなりうつつに浮かぶ  
どこから遊びに来たのか  
遊具は錆つき朽ちかけている  
声は地面に文字を書こうとするが  
校庭はなにも聞き分けな  
用務員のおじいさんは知っている  
この小学校が世界のどこにあるか  
子供たちが世界のどこにいないか  
そして教科書を焼却炉に投げ入れる  
落書きの怪獣は語る  
落書きの飛行機は語る  
子供たちは飛んでどこかへ行つちやつた  
迷子のおばあさんが乳母車を押して入ってくる  
おばあさんは乳母車の中へぐりこむ  
子守唄をうたっているうちに  
子守唄になつてしまふ  
なにもかも忘れた校長先生が窓から見ている  
校長先生の眼前の校庭  
校長先生の記憶の中の校庭  
しわぶきで眼鏡がくもる  
郷愁というお菓子  
忘れもはあだ名  
鬼ごつこの終わり  
オニノゲシの戦き  
声はするのにな  
誰もいない  
校庭はがらんとして  
風が(今)を洗っている  
ZZZ  
ポラブルラジオでニュースを聞いていると  
南米アンデス山脈を走るバスが崖から落ち  
乗員乗客二十八人死亡と報じている  
猿も木から落ちる  
バスも崖から落ちるのだ  
今もこのバスは山道を走っている  
右に左に道はぐるぐる曲がっている  
切り立った崖のなか下には川が哄笑している  
運転手は自信があるのか相当な速度で飛ばしているが  
このバスの運命だつてわかつたものではない  
次の瞬間にはラジオが事故を報じるだろう  
ZZZ

